

經濟論叢

第七十二卷 第三號

銀行學派のメカニズム …………… 小野 一 郎 (1)

イギリスに於ける國民經濟の軍事化と

保守黨の經濟政策 …………… 中 村 忠 一 (20)

組合漁業をめぐる漁村の實態 …… 柏 尾 昌 哉 (41)

H・P・エギラス著「イスパニヤ經濟の發展」

…………… 有 富 重 尋 (62)

[昭和二十八年九月]

京都大學經濟學會

H・P・エギラス著「イスパニヤの經濟發展」

第七十二卷

二六〇

第三號

六二

H・P・エギラス著

『イスパニヤ經濟の發展』

La Expansión De La Economía Española
Por Higinio Paris Eguilaz. Madrid 1944.

有 富 重 尋

は し が き

本稿は京都大學附屬圖書館所藏のイスパニヤ文庫に含まれた

數少いイスパニヤ經濟に關する書物中の一冊であるマドリッド

のサンテヨ・デ・モンカアデア經濟研究所副所長、國民經濟會

議總裁H・P・エギラス著「イスパニヤ經濟の發展」一九四四

年の紹介である。私自身の意圖する研究の方向はイスパニヤ農

業の歴史的並に統計的研究にあり、その意味ではこの書物は私

の研究意欲を十分に充すものではないが、それに至る準備段階

としては、わが國には全くの未知の世界ともいうべきイスパニ

ヤ經濟の現状把握が必要であり、その意味で、この書物の翻譯

も何等かの役割をはたすものと考え、その全譯をこころみると共に、いろいろの意匠で現在のイスパニヤ經濟に多少なり關心をもつ人々のために同書の輪廓を素描することとした。

本書の構成は十四章よりなり、第一章イスパニヤの人口問題、第二章生産の特徴、第三章勞働力の配分、第四章外國貿易の構造、第五章交通機關、第六章消費量の増減、第七章經濟發達の關する諸問題、第八章金融の諸要素と經濟の發達、第九章予算政策と經濟の發達、第十章物價變動と經濟の發達、第十一章農業と林業、第十二章工業の發達、第十三章發達に際しての實際上の制限、第十四章結論となつてゐる。以下これら各章のうち重要なもののみについて簡條がきに要約しよう。

第一章の人口問題については

(一) 一九〇一年——一九四〇年迄のイスパニヤの人口は毎年平均約〇・八四%づつ増加した。(但し内乱前の十年間の人口増加率は年約一・〇七%であった。)この増加率の減少の傾向は死亡率の減少の傾向を上まわっている。従つて主として出生率の傾向より見てイスパニヤの人口がある一定数以上に増加しないことが推定されるのである。

(二) イスパニヤの將來の人口に關する數字の上の計算はあまり價值があるとは思えない。毎年約一・四%よりも出生率が多いことによつて決る。現在の出生減少の傾向が續くものとすれば將來の人口は不動のままの状態であるか、或は一九六七年頃からうじて約三千三百万人に達するであらう。しかし現在の死亡率の傾向に變化が現はれる可能性も皆無とは言えないのだから右の數値の價值は尙疑問である。

(三) 出生率は州の方が都市より大であるが、人口増加率は州より都市の方が大である。

(四) 移民については國內出稼ぎと國外移住に大別しているが、前者については(イ)移民數と大地主數は正比例する。(ロ)面積の増大につれて大地主が介在するようになる。(ハ)土地の分割が大であればある程人口は急速に増大する。

以上の要因をあげているが、國內出稼を妨げているのは土地所有、地代の性格が州毎に異つてることよりも、むしろ民族

的、心理學的、地理學的要素であると考へている。

(四) 國外移住のイスパニヤ人の數は第一次大戰以後特に少くなつてゐる。又最近二十年間をみると入國數、出國數は均衡を保つてゐる。

第二章の生産の特徴については

中部及び南部イスパニヤの生活手段は主に農業であり、その主たる部分をしめる天水地農業の收益は少く、農業人口は大であるが、農業機械は極度に貧弱であり、一ヘクタール當りについてみても、利用された雇傭労働からみても、農業收益は低位である。かくて、

(一) 一般的には農業生産物は内亂の結果としての一九三九年以後の減少を除けば、今世紀になつてからたえず増加しつづけてはいるが、農業専従者一人一ヘクタール當りの收益は低い。従つて生産費用は上昇していると見られよう。

(二) 従業者の割合に收益が低いといふことは賃金水準が低く、又市場吸収力が貧弱なので購買力が著しく制限されている結果であらう。

(三) 人口増大による絶えざる壓迫及び工業輸入品を基礎とする經濟を展開する際の困難さによつて農業保護手段が必要であることは説明される。

(四) 牧畜業は牧場用土地の不充分、並に不安定更に飼料の價格と云ふ障礙にぶつかるといふ。そしてこの障礙は牛肉のコストに現

はれている。

(五) イスパニヤにおける主要な基礎的生産物の一人當り生産量は工業國と比べれば甚しく低い。又そのコストは他國のこれより著しく高い。

(六) 更に鐵道輸送の低能率は生産費を高からしめる要素の一つである。

第四章 外國貿易の構造については

イスパニヤは余裕生産物を輸出する程豊かでないが、絶對量不足の石油、棉花、ゴム、機械、車輛を輸入する手段として止むを得ず鑛物、食糧品（キールが最高位）を輸出している。

(一) 一九一五—一九二〇年を除けば今世紀になつてからのイスパニヤの外國輸出入貿易差額は常に赤字である。最近二十年間のイスパニヤの外國貿易の構造は交易の行はれた國についてみても交易品についてみても大して重要な變化は現はれていない。

(二) 強度に工業化された國と比べてみると、イスパニヤのコストが高いということが製造品の輸出率の上昇を阻害している。

(三) イスパニヤの外國貿易の特徴はヨーロッパ諸國がその重要輸出市場である点に見られる。イスパニヤ經濟にとつて最も必要な商品、たとへば綿、石油等はアメリカからそれを直接輸入する方がヨーロッパの仲介國を通じて輸入するよりもより有

利な價格條件で行はれるであらう。

第六章 消費量の増減については

完全な資料が用意されていないが、食糧品の消費傾向をグラフで示している。全般的に消費量は諸外國より劣つてゐる。

(一) イスパニヤ人の一人當り食糧と外國人のそれとを比較するに、一人當平均食費、年令別人口構成、氣候、勞働條件、民族的特徴を考慮に入れねばならない。

(二) 牛乳製品、牛肉を除き又エスツレマズラ地方、アンダルシア地方の人口のある部分を除けばイスパニヤの食糧生産物の一人當り消費量は一九三六年以前にあつては十分満足出来る程度の量であると考えられ得る。

(三) 一人當り牛肉消費量はヨーロッパの大部分の國より少い。僅か一部ではあるが魚類は牛肉の不足分を補つてゐる。

(四) 第一次内亂及一九三九年以後の世界大戰の結果、イスパニヤ經濟は混亂し、一九三五年の數値とくらべれば一人當りの消費量は減少している。

第七章 經濟發達に關する諸問題においては

世界經濟とイスパニヤ經濟との關連についての、(イ) 外國貿易が如何なる程度にイスパニヤ經濟に影響を及ぼすか、(ロ) の部門が影響をうけるか、(ハ) それほどのようにイスパニヤ經濟に浸透するか、(ニ) 以上の諸關係によりどのような結果が生ずるか、等の問題を提起する。しかしながらこのような問題が

集約的にあらはれるのは主として輸出品を生産している州に於てであつて、イスパニヤのその他の州の大部分には非常に弱い形で傳はるのみである。かくて外國貿易上より見れば、

(一) 其の經濟的發展から見捨てられ、向かつ外國に對抗して保護手段を取つてゐるイスパニヤの經濟は現在のところ一九三六年以前の均衡狀態よりは勝つていない。國家經濟の観点からすべての財を利用することによつてのみ將來の一人當りの消費量を増大させることが可能であらう。

(二) イスパニヤ經濟の發達は傳統的な輸出品の單なる増大によつてではなく、ある特定州のみならず全州の消費量の一般増大によつて即ちイスパニヤ經濟構造を變化せしめ得るような總合的手段によつて其の實現は期待され得る。

(三) 要するに經濟發展は年間國民蓄財量の大小にかかわらず、生産各部門における其の蓄財の投資の方法及び一般購買力の適當な配分を介して消費量を維持するための組織力の程度によつて調整されるとしている。

第八章 では其の焦点を

(i) インフレはどのようにして起るか、(ii) インフレは經濟發達を好都合にするか否か、(iii) 銀行は何を參考にして通貨の發行に努むべきか、(iv) 銀行業との關連に於て國家はどのような政策をとるべきか、にむけて各項目について分析してゐる。

第九章 の豫算政策については、

H・P・エギラス著「イスパニヤ經濟の發展」

(一) 歳入及び歳出の豫算は一九三五年迄は名目増加も實質増加も示している。一九三九年以降再び名目増加はみられるがベセーターの購買力の減少を考え合せるならば、歳入においても歳出においても實質増加はしていないのである。

(二) イスパニヤの公債は一九三五年の一人當り八百八十二ベセーターから一九四三年には一人當り千三百四十四ベセーターへと増大している。しかしベセーターの購買力の減少を考慮に入れるならば一人當り實質負債は一九三五年より遙かに少なくなつてゐると見られる。

(三) 豫算における歳出の割合は一九三九年からはかなり減少してきてゐる。

(四) 豫算總額が増大するというのは發展の過程を維持するために絕對必要である。

第十章 においては

先づ物價は一般的に流通通貨によつて決定的な影響をうけることがとかれ、通貨の購買力には量、型の問題その他の問題があることを指摘する。物價政策の基礎としての生産、消費、物價の各構造の諸關係に對しては同時に對策がとられてこそ生産構造が改革され安定される。物價變動と國民經濟構造の關係については具体的に農業、工業の場合をあげて説明してゐる。

第十一章 については

(一) 最近七十五年間をみるとイスパニヤ山林面積（樹木のある

面積)はほとんど殆ど減じている。一人當り木材生産量はヨーロッパ諸國中最も低い國の一つである。

(二) 山林地對策として、(一)再植林對策、(二)濫伐對策があるが、國家對策の貧弱さは、再植林地帶で放牧を生活手段とする住民が生活の脅威としてその政策に反對するのと相まつて困難な状態にある。

(三) 農業については一九六七年には推定人口三千三百万人即ち二七%増加し、そのため農業生産物を増大するには天心地收益の改善、新灌溉地の開發が可能であるとなし、收益傾向に影響する要素としては、(イ)耕作面積、(ロ)肥料、(ハ)種子、(ニ)犁耕をあげ以上の影響は安定的であるが、氣温の影響はイスパニヤの場合特に不安定である。

(四) 灌溉地からの生産物や、牛乳、牛肉についてイスパニヤ全人口の消費量を容易に維持し或いは向上するためには新灌溉地を毎年約四万ヘクタールづゝ開發することが必要である。もし天心地收穫の増大や灌溉地開發の増大が實現されず、又一九三六年前の消費水準をかるうじて維持することが出来る程度にすぎぬとするならば、又少くとも入口増大の現在の傾向が今後もつづくなら食糧の輸入は絶対に必要であらう。

(四) 牛肉生産量については牧地面積が問題となるが、牧地は農地との關係においてこれ以上擴大出來ず、従つて牛肉の消費をおさえることが必要である。

(四) 農業勞働力を減少することは一人當りの生産向上の先決條件の一つである。ここで農業における機械化が問題となる。機械化により浮いて來た勞働力は他の經濟部門の生産に役立てる。

(四) 若し收益の増大を伴はないならば單に實銀あるいは土地制度に對して加えられる法的處置は農村の購買力の上昇を誘發するような影響をあたえないし又市場の購買力を増大するような影響をもあたえない。

第十二章 工業の發達については

工業發展は、(イ)技術進歩の程度、(ロ)エネルギー及原料の保存、(ハ)市場によつて決るとのべ、工業がイスパニヤにおいて特に遅れているのは、近代自然科學の中心理論をイスパニヤ人の頑固な考え方が近づけぬからであると見てゐる。かくて、(一)科學、技術がおくれていることがイスパニヤの工業化の發展を困難ならしめる原因の一つとなつてゐる。

(二) イスパニヤの動力源や原料の貯藏量はイスパニヤの工業の發展を許すに十分である。しかしながら色々な要因が生産コストを上昇せしめている。

(三) 石炭、電氣等の動力源の増大は工業發展を有利ならしめる基本的條件である。従つてそれらの生産は特別な手段で奨励されねばならない。

(四) 水力發電能力は約千万——千二百万馬力の間であると

考えられるが、實際利用量は約二百万馬力であらう。

(五) 石炭埋藏量は約四十四億四千万トンであるが、石炭採掘の悪条件として、(イ) 鑛床が小さい、(ロ) 斷層その他多くの障碍、(ハ) 鑛床がほとんど垂直状態のため採掘困難、(ニ) 鑛床が交通不便の土地に位置すること、(ヘ) 埋藏量の偏在、(ホ) 海上輸送の必要、(ト) 濫掘の結果としての石炭賣價の下降、があげられる。

(六) 石炭の一九四二年の生産量は千五十万トンであり内乱前にくらべれば生産量は増大しているが全必要量をみたすほど十分でない。

(七) 鑛物として硫鐵鑛、マンガン、銅、鉛、亜鉛、錫、ウルフラム鑛、水銀等がある。

(八) 國內用並に輸出用として化學肥料を年間約三十万トン生産している。

(九) 生産量、生産費の上から見て、イスパニヤ工業の中で繊維工業が最も完全である。

(十) 農業従事者の貧弱な購買力は工業發展の障礙物となつてゐる。

第十三章 發達に際しての實際上の制限については、

經濟發達は、(イ) 年間蓄財量、(ロ) 勞働力及技術組織、(ハ) 各部門における蓄財の投資の型、(ニ) 購買力の適當なる配分を介しての消費を統御するための組織効果の程度により左右されると

のべている。従つて婦人勞働の強化、新勞働力の配置、失業工員の適當な就業により經濟發展は期待される。生産及購買力配分の合理化が達成されなるとき經濟の恒常的發展は期待されな